三、南京の陥落

南京は、中国の文学、芸術および政治の最高の中心地として長い間称賛されてきた都市である。南京は三世紀から六世紀にかけて古代中国の首都の役割を担い、その後、間をおいて一四世紀にも首都に指定された。中国の書道と絵画の規範が成立し、中国語の言語における四声の体系が確立し、最も有名な仏教経典が編集され翻訳され、古典的な「六朝」随筆形式（中国の詩と散文の混合）が生まれたのが南京である。一八四二年には、南京で、阿片戦争を終結させ、中国を海外貿易に開放させた条約が締結された。そして、一九一一年に国民党の指導者孫文が黎明期の中華民国の初代臨時大総統に就任した地が南京である。今日、彼が葬られている中山陵は南京の誇りである。

中国人に向かって南京の名を言うと、彼（女）は古代の皇宮、多数の陵墓、博物館、記念堂に埋まった都市の絵を描くだろう。その絵には、明代に造られた武将と動物の複雑な石像、有名な鼓楼（七〇〇年前にマルコポーロが当初の建物を見たが、その三世紀後に軍事指導者によって建て直され、兵士たちに信号を送るために塔の上で巨大な太鼓が打ち鳴らされた）、そして南京郊外の情景――丘陵の付近に据えられた寺院、茶館とその湖の表面の蓮の花、揚子江に架かる頑丈な橋――が含まれるだろう。

幾世紀もの間、水と山は南京に美しさを与えてきただけでなく、軍事的な保護をも提供してきた。西の揚子江と東の紫禁山によって囲まれているこの都市の自然の防御能力は、「虎踞龍蟠（虎がうずくまり、龍がとぐろを巻く）」という故事成語を借りて言い表すことができる。

しかし、悲しいことに南京は三度の侵略を被った都市である。

最初に侵略されたのは千年以上も前の六世紀末で、このときには野蛮な遊牧民族が市内の重要な建築物をすべて破壊し、城壁の内側の土地さえもが掘り返された。二度目の侵略はそれから千年以上も後の時代、一八五三年から一八六四年の期間に、太平天国の反乱軍がこの都市を手中に収めたときだった。反乱軍は狂信的な洪秀全に指導されていた。彼は国家のエリート官吏への進路を保証する科挙の受験に失敗した後に、自分がイエス・キリストの弟だと確信するに至った。それから、彼が先頭に立って追求した清朝転覆の運動は一三年間以上継続して、結果的には二千万人もの中国人を殺すことになった。反乱軍は、完全に鎮圧され滅亡するまでの一〇年間以上にわたり南京を首都にしていたが、彼らが最終的に鎮圧されたときに南京は煙でくすんだ廃墟になり、あの大報恩寺瑠璃塔までもが破壊されてしまった。極彩色の瑠璃磚で作られたこの塔は、中国にあったこの種の建造物の中で最も美しいものだったと考えられている。

その日以降、一九世紀の残りの日々の間、南京は平穏と隠遁の中でまどろんでいた。満洲族の皇帝が北方の都市、北京からの中国統治を再開したときに、南京は文化的な遺跡以上のものではなくなった。南京がその重心としての地位を取り戻したのは国民党が清朝を覆し、南京を中国の首都に指定したときだった。南京は一九二八年に公式に首都になった。

大虐殺の年の一九三七年には、古い南京、清朝の南京と、国民党の新しい南京とが競合していた。街路には古い南京の痕跡が残っていた。飲食店の行商人の天秤棒の両側には小さなどんぶりとお茶のポットの籠がさがり、露天の紡績工場では手織職人が絹の機織に身をかがめ、そば屋の職人は手作業で小麦粉を引き伸ばして麺を打ち、街路を歩く板金屋の錫製品がジャラジャラと音を立てた。靴の修理屋は客の家の門前で靴を繕い、真ん中に四角い穴のあいた銅貨を握り締めて熱心に見つめる子どもたちの目の前で、飴屋が飴を作った。キーキーと音を立てる手押し車を押す男は、アシをとても高く積み上げていたので、手押し車も男も見えなくなった。それでも、至る所に新しい南京が顔を見せていた――少しずつ土と砂利の小道に置き換わってきたアスファルトの道路に、点滅するガス灯、蝋燭、石油ランプに完全に入れ替わった電気とネオンの明かりの中に、通りで水売りから買うのではなく、蛇口から流れ出す水の中に。軍高官、官僚、外国の外交官たちが一杯に乗り込んだバスや自動車は、人力車、野菜を積んでラバに引かせる荷車、あるいはぶらぶらと歩いている大勢の通行人や動物たち、犬、馬、ロバ、時には水牛や駱駝の歩く間を追い越し、縫うように走っていた。

しかし、古い南京の一部分はけっして変わることがないかのようだった。都市の周囲は明朝の時代に建設された古い広大な石の城壁に囲まれていた。ある宣教師は、この城壁を世界最大の不思議のひとつだと言った。彼は強調する。もし誰かがその頂上に登ることを許されたら、間違いなくその人物は中国で最も壮大な光景を眺めることができるだろう。都市の南端の壁の頂上から、銃眼の埋まる胸壁を超えて、労働者階級の居住地区の塵にくすむ灰色の煉瓦、富裕な人々の家の屋根の赤と青の瓦を見ることができ、北を望めば、政府の地区の近代的な高層建築、西洋の建築様式で建てられた行政府や大使館を見

ることができるだろう。

北東方向を凝視してみよう。暗い紫禁山一帯に南京のもっとも富裕で有力な市民たちが所有する別荘が点在する中、柔和に煌(きらめ)く白い孫文の霊廟を見つけることができるだろう。次に、北西を向けば、河岸地区の産業活動が垣間見られる。工場から立ち昇る幾筋かの煙、煤炭港の真っ黒な染み、埠頭の近くに浮かぶ蒸気船と砲艦、市内を横切る北中国鉄道と京滬鉄道の線路と地平線は、南京北部の郊外である下関の駅で交わっている。地平線に沿って、南京の城壁の向こう側には、西から北に湾曲して轟々と流れる巨大な揚子江のカーキ色の水が見えるかもしれない。

一九三七年の夏、このように光輝にあふれながらも、不揃いな南京のすべてが、毛布の下で横たわって眠っているかのようだった。高い湿度のよどんだ空気のため、この都市に「中国の竈(かまど)」のひとつという称号が贈られてから久しかった。付近の田畑の夜の土壌の刺激臭と混じりあう暑さは、夏の猛暑の時期に、富裕な人々を海岸沿いの避暑地に追いやった。残った人々にとって、夏は、頻繁なうたたねの、葦や竹の団扇で起こすけだるい風の季節、太陽をさえぎって陰を作る竹のすだれに覆われた家々の季節だった。晩になると、カマドになった家から、椅子を引き摺って逃れ出た隣人たちが、夜更けまで世間話に興じ、外気の中で眠りについた。

数ヶ月のうちに、戦争が彼らの家々の前にまで襲来し、家屋が炎に包まれ、街路に血が溢れることになることを、誰が予測できたのだろうか。

八月一五日、金陵学院の心理学の教員だった張小松が金切り声のようなサイレンの音を聞いたのは、

ちょうどベッドに横たわってまどろんだときだった。「空襲の避難訓練があったのかしら」。彼女は考えた。「どうして朝の新聞に発表がなかったのかしら」。

その月の初めに上海で日本軍と中国軍の戦いが勃発したため、南京の政府が、他の地区も同じように敵の攻撃にさらされる可能性を覚悟し、それに備えざるを得なくなったとき、中国の政府当局は空襲に対する訓練を実施しただけではなく、居住民に対して家にカモフラージュを施し、防空壕を掘るように命令した。南京の至る所で、人々が家の赤い屋根と白い壁を黒く塗装し、庭に避難用の防空壕を掘った。それはまるで、この都市が「大規模な葬式」に備えているかのようだった。張は思い出しながら怯えた。

だから、八月一五日に、張が二度目の警報を聞いたとき、彼女は起き上がって確認しようとした。しかし、家にいた彼女の友人たちが、あれは別の訓練だと言い聞かせたので、彼女は再びベッドに戻った。しばらくして、ごろごろっという鈍い機関砲のような音を聞くと、彼女はまた起き上がった。「あら、あれは雷だわ」。一人の友人が言って、小説を読み続けた。彼女は大げさに興奮したことを恥じてベッドに戻った。しかし、それから彼女の耳に響いてきたのは、聞き間違える余地のない機関銃の砲火の音と頭上の飛行機の音だった。南京は史上初めての空襲を経験したのである。

その後の数ヶ月間、南京は日本の爆撃機の空襲を何十回と受け、居住者は地下室や、濠や、庭の防空壕に隠れなければならなかった。日本軍の飛行士は都市を無差別に爆撃し、学校、病院、発電所、政府庁舎を攻撃し、何千もの人々が富めるものも貧しいものも都市を捨てて避難することになった。

現在はサンフランシスコで東洋医学の開業医になっているフランク邢（シン）は、一九三七年の夏に両親とともに南京を後にしたときの、熱に浮かされたような悪夢のような状況を思い出す。当時、一一歳の少年

だった彼は、旅立ちに備え彼の宝物のパチンコとビー玉を荷造りしていた。そのとき、彼の祖母は鉄道機械工だった彼の祖父に、将来の緊急時に備えて質入する翡翠と銀の腕輪を渡していた。彼の家族を漢口に運んだ汽車はすし詰め状態になっていて、座席を求められなかった何百人もの避難民が客車の屋根の上に座り、文字通り座る場所を得られなかったほかの人々は列車の下にぶらさがった。彼らの身体は、軌道のわずか数インチ（十数センチメートル――訳者）上に吊りさがっていた。避難の旅の間、邢（シン）は人々が汽車から振り落されたとか、車輪の下に巻き込まれたというような噂話を聞いた。邢自身も、日本の爆撃機に攻撃され、彼の家族が列車から飛び降りて共同墓地に隠れなければならなかったときには、危うく命を落とすところだった。

私の祖父母も、南京から疎開するときに、いま一歩で永遠に離れ離れになるところだった。私の祖父、張鉄君（チャンティエチュン）は詩人でジャーナリストでもあり、一九三七年当時は国民党職員の哲学の指導教官として、中国政府に勤務していた。首都に対する日本軍の爆撃のために、彼と彼の家族は何度も、木製の板と砂袋に覆われた濠に隠れなければならなかった。一〇月になって、祖父は私の祖母（当時二〇代前半の妊婦だった）と伯母（当時一歳の子どもだった）が南京にとどまることは危険だと判断した。二人は、祖母の実家の村へ帰った。実家は、上海と南京の間の太湖の湖岸にある宜興市周辺の農村部にあった。

一一月の孫文の生誕記念日に、祖父は南京を離れて妻と家族に会いに行った。数日後に南京に戻ると、彼の所属する作業グループの全員が、市から疎開するために忙しげに荷造りをしていた。グループの疎開のために揚子江岸の都市無湖（ウーフー）から船が用意されていることを聞いた祖父は、その場所ですぐに落ち合おうと家族に使いを送った。

ことは思い通りには運ばなかった。祖母の村から無湖(ウーフー)市までの鉄道は、日本軍の空爆によってほとんど破壊されていた。唯一の手段は、この地域全般を網の目状に複雑に連絡している水路を、サンパンという小船で移動することだった。

長い四日の間、祖父は不安に襲われながら、埠頭で後から後から乗船していく戦争の避難民を探し続けた。四日目になっても、彼の家族はまだ到着せず、彼は誰も経験したことのない選択をしなければならなくなった。彼の妻と娘が南京へ向かっていないと信じて、次の、無湖発最終便に乗船するか、残るべきか。しかし、市が間もなく侵略者の手に落ちることは火を見るよりも明らかだった。

絶望の中で、彼は天に向かって、愛する人の名前を叫んだ。「以白(イーペイ)!」。そのとき、彼は遠くのほうから、こだまのような返事を聞いた。その声は、ずっと離れた向う側から埠頭に近づいてくる最後のサンパンから聞こえてきた。小さなサンパンは、彼の妻と娘と何人かの親戚を運んできた。彼らの再会は奇跡だったと、私の母はいつも言っている。

私の祖父母とは異なり、南京の多くの住民は一一月の後半になっても市内に残っていた。あるものは待機して様子を見ようとしていた。残っていた他のものはあまりにも貧しいか、あまりにも年をとりすぎていて、別の方法を実行することができなかった。そのような人々には、一一月は悪いニュースが伝わり続けた月だった。上海での戦闘はうまくいっていなかった。中国兵の長い列が、疲れきり、傷つき、士気をくじかれ、重苦しい沈黙の中で行進し、あるいは赤十字の旗で覆われた大きなトラックに乗り、前線から帰ってきた。彼らの多くはまだ少年で、一二歳にもならない子どももいた。重武装した新しい

部隊が河岸に向かって街路を行進し、前線に曳航されていくジャンクに乗り込んでいく事実に、慰めを感じることができる人もいた。明らかに、戦いはまだ終わっていなかった。雨と吹き荒ぶ風を切って、小型の近代的な中国軍の戦車がゴロゴロとカタピラの音を立てて上海に向かっていた。その前には、木綿の軍服、毛布、小銃、機関銃を重たげに運ぶラバの列が進んでいた。

その月の下旬に、恐ろしいニュースがとうとう南京に伝わってきた。上海が、「中国のニューヨーク市」が、陥落した。いまや、海と首都南京の間には二〇万以上の日本軍がいて、七〇万ほどの中国軍が退却の途上にあった。彼らが持ってきたのは誰も聞きたくないニュースだった。上海を滅した日本軍は、いま、その矛先を南京に向けている。

上海の陥落は国民党の指導者蒋介石にとって手痛い打撃だった。中国最大の国際都市の喪失に直面し、蒋は困難なジレンマの解決を求めた。南京を日本軍から防衛するか、首都全体を安全な地域に移すか。最終的に、総統は両方を選択した。しかし、彼自身が南京に残って南京を防衛するのではなく、その重荷を別の人に負わせた。唐生智という部下に。

蒋と唐生智の関係は奇妙で非常に複雑なものだった。どちらも実際には相手を信頼していなかった。事実、二人の男はときには協力者で、ときにはライバルだった。たとえば、国民党が国家統一をめざした北伐の時期には、唐は北方の封建軍閥に対する蒋の戦争遂行を支援した。しかし、唐が蒋に対する特別な忠誠を示すことはなく、二人の男の間の権力闘争により、唐は二度中国から追放された。一度目は香港へ、次には日本へ。だが、一九三一年に、「満州」をめぐって中国と日本の関係が危機的な状況に

なったときに、蔣は唐を召喚し、唐は中国の防衛力を強化する任務に戻った。唐は中国軍の位階をすばやく駆け上がり、一九三七年には蔣政権の軍事訓練の責任者になっていた。

一九三七年一一月、首都を防衛するか放棄するかという問題について何度か持たれた軍上層部の会議で、蔣の幕僚のうち強力な防衛を支持する意見を述べたのは、実質的に唐一人だった。彼は主張した。南京を防衛することにより、中国軍は同時に日本軍の進攻を遅らせることができ、残りの中国軍に休養と再編成の機会を確保することができる。

しかし、誰が残って防衛を指揮するのかと蔣が聞いたときに、唐は他の高官たちとともに黙り込んだ。唐に向かって、蔣は最後の言葉を放った。「私が残るか、君が残るかだ」。彼の強い視線を感じた唐は、疑いもなく他の選択肢のないことを悟ったのだろう。「どうして総統を残すことができるでしょうか？」唐は言った。彼は南京に残り、死を賭して戦うことを約束した。

南京の防衛を唐に託する決定は大ニュースになった。一一月二七日に、唐は士気を鼓舞するために記者会見を行った。記者たちの前で、彼は激しい演説をした。南京と生死を共にすることを誓う。彼の演説は非常に情熱的だったので、それが終わったときに記者たちは彼を大いに喝采した。

しかし、記者の中には唐がひどく動揺しているようにも見えたことに気づいた者もいた。事実、彼は大病から癒えたばかりだったし、ある外国特派員によれば、彼は「朦朧としているか、あるいは薬が効いている」ように見えたという。彼はひどく発汗し、誰かが渡したタオルで額の汗をぬぐっていた。

おそらく蔣は、歴戦の日本軍を前にした彼の部下がまともに戦いの体をなすことができないことを

知っていて、中国が実際に強固な防衛を行うことを誇示するためにだけ彼を指名したのだろう。あるいは、彼は二番目の計画の準備が必要だと留意していたのであろう。明らかなのは、一一月の後半には、二番目の計画が確かに実施され進行していたことである。まず、蔣はほとんどの政府職員に、南京の西にある三つの都市、つまり長沙、漢口、および重慶に移動するよう命令した。後に残された少数の職員の間には、自分たちは捨てられて日本軍の手に委ねられたのだという噂が流れた。数日のうちに、荷物を満載した公用車と見られる自動車が街路を埋め尽くし、素早く、いずこへともなく消えていった。バスと人力車も政府庁舎から出発して去っていき、市には公共の移動手段がなくなった。間もなく、ほとんどのトラックが去っていった。もっぱら農村から南京へ米を輸送するために使用されていたトラックさえも同様だった。そして、一一月の中旬に、去っていった政府職員と入れ替わって五万の中国軍が到着した。上流の港から到着した彼らは、まず、河岸に多数の武器の箱を積み下ろし、それぞれに空になった政府庁舎の建物を選んで占領した。一二月までに、九万の中国軍が南京地区に集結したと推定される。

軍隊は南京の姿を変貌させた。中国兵は街路に塹壕を掘り、地下に電話線を埋め、市の交差点に鉄条網を張った。交差点は戦場のようになった。また、軍隊は城壁を強化し、古代の胸壁に沿って機関銃の台を設置した。彼らは三つの城門に、軍関係の通行専用の狭い通路を残して、ほかのすべての城門を閉じた。城門は二〇フィート（約六メートル）の深さの土嚢で封鎖され、木材とL字型の鉄材で補強された。少なくとも城門のひとつは、全体がコンクリートで固められた。

一二月の初めに、軍は、代価も影響も省みず、城門周辺一マイル（約一・六キロメートル）以内の戦場となる地域を焼き払うことにした。代価は計りしれなかった。市の外縁に沿って、炎がガソリンを、

弾薬を、兵舎を、農業試験研究所を、警察訓練学校を、そして陵墓公園の建物をなめていった。周辺地域で、兵士たちは、わらの小屋、わら葺き屋根の農家、樹木に、竹林、そして下生えの潅木に火をつけた。南京の主要な郊外地区も例外ではなかった。軍は、下関と南門周辺を灰にする前に、その地域の住民を城内に追い込んだ。家を破壊目標にされた人たちは、一時間以内に移動しなければスパイとして逮捕される危険があると通告された。軍は、侵略者が使用する可能性の残る構築物を取り除くための戦略的措置であると言って焼却行為を正当化した。しかし、ある外国特派員は、焼け焦げた壁でも、完全な建物と同程度に、銃弾からの防護物として日本軍が使用できると指摘した。彼は推測した。実際のところ、火は中国人の「憤怒と苛立ちのはけ口」なのだ。日本人には焼け焦げた大地以上のものを残したくないという熱望なのだ。

このようにして、都市は侵略に備えた。体力、判断力、あるいは撤退の機会のあるものはすべて、人も物も避難し始めた。博物館は完全に梱包され、運び去られた。一二月二日、故宮博物館の財宝――実質的に中国の文化遺産のすべてである――を梱包した幾百もの箱が船に積み込まれ市外の安全な保管場所に向かった。六日後の一二月八日、蒋介石、彼の妻、そして彼の顧問が飛行機で市から逃げ去った。もはや、疑う余地はなかった。日本軍の南京攻略が始まろうとしていたのである。

南京大虐殺の数十年来の謎は、一九三七年一二月一二日に、あれほど多数の兵士がいながら、わずか四日間で南京市はどういうふうに陥落したのかということである。いずれにしろ、軍隊は五ヶ月間を十分に持ちこたえられる弾薬を持っていた。その結果、生き残った人々、ジャーナリスト、歴史家の多く

は、崩壊の原因を中国兵の気力の喪失に帰してきた。また、彼らは最も必要なときに軍を見捨てた唐生智に悪人の汚名を着せてきた。

新しい資料に基づいて歴史を見直してみると、これとは幾分異なる図が現われてくる。上海の戦闘の間、ほぼ三千の戦闘機を有する日本の空軍に比べ、三〇〇機の小さな中国空軍は幼児のように見えた。それ以外の点でも、中国人は空中において日本人の敵ではなかった。上海戦において、イタリア人に訓練された中国軍飛行士は、都市に大きな災害をもたらした。西欧の艦船の近くや、国際地区の混み合う街路や建物にまでも爆弾を落とした。

しかし、どんなにひどい空軍でも、空軍がないよりはましである。そして、それが唐生智にゆだねられた状態だった。一二月八日、蔣介石と彼の顧問たちが市を去ったその日に、中国の空軍部隊もすべて去っていった。その後の四日間、唐は、航空機を使用して収集する、日本軍の部隊配置や移動に関する軍事情報を全く得られない中で戦った。南京周辺の丘陵に高価な中国の砲台を配備しても、威力を発揮できなかった。

第二に、重慶に移動した政府職員は高性能の通信機器のほとんどを持ち去った。その結果、軍の一部隊から他の部隊への連絡ができなくなった。

第三に、兵士たちは同じ地域の出身ではなかったので、文字通り互いに会話をすることにも困難が生じた。南京のある医療補助員は回想する。中国人軍医が広東語を話し、中国人兵士は北京官話を話すという状況下で、病院内では際限のない混乱が続いていた。

第四に、この軍隊の「兵士たち」の多くは、周辺地区から自分の意思に反して、誘拐され、または徴

兵されて、突然、軍隊に入れられ兵士になった人たちだった。大多数の人々は南京の前に銃を手にしたこともなかった。銃弾が不足していたために、これら新兵たちに射撃を教えるために無駄にすることはできなかった。戦闘経験のある兵士の多くは、上海から引き上げてきたばかりだった。疲労し、飢え、さらに病に冒され、彼らのほとんどは消耗しきっていて都市の防衛のためにバリケードを構築し、塹壕を掘るという必要な準備作業を完成させることができなかった。

何よりも最悪だったのは、中国軍兵士には連帯感や目的意識の自覚がほとんどなかったことである。ある中国軍将校は、南京の戦況報告の中で、部隊がある地域を占領すると兵士たちは遊休状態になり、他の部隊が近くで日本軍との戦闘を行っていても、率先して支援しようとしなかったと指摘している。明らかに、指揮将校もそれ以上のものではなかった。報告者は分析する。彼らは互いに信頼せず、このために日本軍は地域から地域へ移動し、中国軍を各個撃破していくことができた。

一二月九日に南京周辺で、日本軍の航空機が、日本軍の三人の大将の一人である松井石根が執筆したちらしを投下し始めた。ちらしの文面は、「無辜の民衆」と市の「古蹟、名勝」を護る最良の方法は、降伏することだという。文面によれば、日本軍は「抵抗者に対しては極めて峻烈にして寛恕せざるも、無辜の民衆および敵意なき中国軍隊に対しては寛大をもつてし、これを犯さず」と約束していた。それは二四時間以内、翌日の正午までに市が降伏することを要求し、「交戦を継続せんとするならば、南京は勢ひ必ずや戦禍を免れ難し」としていた。

公式には、唐は最後通牒の言葉に激怒した。ちらしを床に投げ棄て、彼は二つの命令を口述し、命令

は各部隊に配布された。第一の命令は軍の退却を禁止していた。「我が軍は前線で寸土も譲らずに戦わなければならない」。命令書は言う。「この命令に従わずに退却するものがいれば、厳しく罰せられるだろう」。第二の命令は、軍が船を使用して、私的に揚子江を渡ることを禁止していた。軍部隊で保有している船は、輸送部門に返還するよう要求される。唐は第七十八軍を輸送問題の指示および管理を担当する部隊に指名し、軍の人員が私的に船を使用していることが発覚したら罰せられると警告した。

しかし、非公式には、唐は休戦交渉を模索していた。最後の一人まで戦うという最初の約束にもかかわらず、彼は市内での対決を回避する方策を熱心に求めているように見えた。彼のこの姿勢を支えていたのは、少数のアメリカ人とヨーロッパ人がまだ市内にいたことだった。この私心のない人たちは、自分たちができることをするために南京に残ることを決め、南京安全区国際委員会を創設した。彼らについては、後の章で詳しく述べることになる。彼らが最初に行った措置のひとつは、市の一定の区域を遮断して南京安全区または国際安全区として宣言し、その二・五平方マイル（約六・四平方キロメートル——訳者）の区域内の人間に対しては、中国人でも非中国人でも、日本軍は手出しをしないという状態を保障しようとしたことだった。次に、生命を救うための最終的な活動の中で、彼らは日本軍との停戦の調停を試みようと申し出た。彼らの案は、三日間の休戦協定を結び、その間、日本軍は現在の位置に止まり、中国軍が市外に撤退する中で、南京に無血入城することができるというものだった。唐は停戦調停に同意し、委員会に、アメリカ大使館経由で、彼から蔣介石への伝言を発信することを依頼した。この案はアメリカの砲艦パネー号のラジオから総統に伝送された。蔣は即座にこれを拒否した。

一二月一〇日、日本軍は都市の降伏を待った。正午、二人の日本軍参謀将校が東側の城壁の中山門で、

中国政府が停戦の白旗を掲げた使者を派遣するかどうかを確認した。使者が来なかったとき、日本軍の上級司令部は市のすさまじい爆撃を命令した。

数日の間、中国軍と日本軍の間の南京をめぐる激しい戦闘が続いた。日本軍は市に爆弾を投下し、重砲火で城壁を打ち砕いた。後に唐は、蔣宛の長いとりとめのない絶望的な電報を公開して、市の重要拠点や城門付近の容易ならざる戦況を明らかにした。

一二月九日から一二月一一日まで、日本軍は光華門の突破を三度試みた。一度目は、教導総隊が抵抗を試み、第一五六師が痛烈に反撃して、多数の敵を殺害し、城門を確保した。一一日の正午より、雨花台地区から不利な通知が頻繁に伝えられ、安徳門、風台門が敵の手に落ち、即座に第八八軍に戦線を縮小し、第七四軍と第七一軍と合流することを命じ、急ぎ、第一五六師を救援に向かわせた。

しかし、もっと悪いニュースが唐を待っていた。そして、今回の悪いニュースは敵の成功によるものではなく、蔣自身の側から届けられたものだった。一二月一一日正午、唐の本部に顧祝同将軍からの電話が入った。顧は唐配下の軍団の全面退却を命じ、これは蔣からの直接の指示であると通告した。唐自身は、川の対岸にあり、渡河船と鉄道の終点である浦口に直行すると、待機している別の将軍が彼を安全な場所に移動させるということだった。

唐の表情に衝撃が走った。自分の軍団を見捨てるという、およそ指導者として不名誉な選択を要請されている事実はおくとして、彼は別の非常に深刻な問題を抱えていた。その時点で、彼の軍は、苛烈な

戦闘の最中にいた。彼は顧に、日本軍がすでに前線に突入していて、退却命令の実行は不可能であると説明した。それは実際には潰走に転じることになる。

顧は言った。「それについて憂慮する余裕はない。とにかく、貴殿は今夜中に退却しなければならない」。突然かつ性急な退却がもたらすと思われる結果について唐が再度説明すると、顧は、蔣が個人的に唐に「今夜中に渡河する」よう命令していることを思い出させた。必要ならば部下を残して状況に対処させろ。しかし「貴殿は今夜中に川を渡らなければならない」。顧は繰り返した。

不可能だ。唐は言った。どんなに急いでも、揚子江を渡ることができるのは明日の夜になる。顧は、敵との状況が切迫した事態に発展しているので、可能な限り早く市を離れるよう警告した。

その日の午後、唐は命令を促す蔣の電報を受け取った。「唐司令長官、戦況を維持できないのならば、将来の反攻に備えて、[軍を]保存し、再編成するために、退却の機会をつかむべきである。介。十一日」。その日のうちに、窮迫する唐のもとへ、蔣からの二通目の電報が届き、再び退却を迫った。

戦線を維持できず、圧力をかけられ、唐は従うことにした。それは中国の軍事史上最悪の結果のひとつをもたらすことになる決定だった。

一二日午前三時、唐は自宅で未明の会合をもった。副司令長官と最上級参謀の集合した中、彼は悲痛な表情で、戦線が崩壊していること、城門を防衛する方法がないこと、そして蔣介石が軍に退却を命令したことを説明した。彼は部下に、命令書と、それに関連する文書を印刷し、退却に備えるように指示した。その日の午後一時、命令書は中国軍に配布された。

しかし、ぎょっとするような報告が唐に届けられた。唐は揚子江を通って軍を撤退させようとしていた。ところが、彼は日本海軍が川を掃海して八卦島の東側に迫り、南京に向かっていることを知った。それが到着すると、南京からの最後の退路が断たれることになる。絶望的状況下で、唐は再び寧海路五号の南京安全区国際委員会を訪ね、ドイツのビジネスマンのエドゥアルト・シュペアリンクに日本軍との停戦交渉の仲介を頼んだ。シュペアリンクは旗と伝言を日本軍に渡すことに同意したが、その後、松井大将が唐の申し出を拒否したと報告した。

その日の午後、彼の幕僚たちが二度目の会合に集合するほんの数分前に、唐は家の窓から外を見つめていた。街路に自動車、馬、避難民が溢れ、渋滞し、若者も老人も、病弱なものも壮健なものも、都市全体が逃げ出そうとしていた。少しでも分別があるものならば誰でも脱出を決心したときに、彼はようやく意を固めることができた。午後五時に会合が始まった。会合は一〇分間で終わった。野戦司令官と中央司令官の連絡経路が崩壊していたので、最上級の軍幕僚の多くが出席しなかった。他のものは、状況を自ら判断して逃走していたので、通知を受け取らなかった。

唐は自宅に集まった人たちに言った。日本軍はすでに城門を破壊し、城壁を三箇所で突破している。「諸君らには防衛線をまだ保持する自信があるか？」彼は集まった人々に聞いた。数分の間、彼は返答を待ったが、室内の沈黙を破るものはいなかった。

しばらくの沈黙の後に、唐は静かに退却の戦略を論じた。撤退は数分後、午後六時に開始し、翌日の午前六時までに完了する。軍の一部は――第三六師、および憲兵隊は――、下関から川を渡り対岸の指定された村落に集まる。彼は言った。それ以外の部隊は日本軍の包囲を各自突破して、生き残ったもの

は安徽省南部地域に集結すること。残していく武器、弾薬、通信機器は破壊し、軍の撤退路にある道路と橋はすべて焼却する。

同じ会合で唐は直後に命令を変更した。彼は部下たちに言った。第八七師、第八八師、第七四軍、および教導総隊が日本軍の包囲を突破できない場合には、彼らも渡河を試みること。こうして、唐は五つの師団に揚子江をわたる権限を与えた。その人数を合わせると、本来の作戦で指定した人数の倍になる。その日の晩、唐自身も埠頭に向かった。このときのことを唐は生涯忘れることができなかった。

予想通り、退却命令は中国軍を大混乱に陥らせた。何人かの将校は市内を無計画に走り回り、遭遇した人間すべてに撤退を伝えた。これらの兵士たちは市を離れた。他の将校たちは何も語らず、自分の部隊にさえそれを伝えなかった。その代わりに、彼らは自分の潜伏場所を確保した。彼らの兵士たちは日本軍との戦闘を継続し、他の部隊が退却するのを見たときに、大量脱走を目撃したと考え、退却を阻止しようと、逃げていく何百人の同志たちを機関銃で銃撃した。市を脱出しようとする焦りと混乱の中で、少なくとも一台の中国軍戦車が進路上で無数の中国軍兵士を引き倒して進んでいき、手榴弾で爆破されたときにようやく停止した。

そのような、全面的に悲劇的な状況下の退却の合間にも、滑稽な一幕があった。兵士たちが民衆の中に紛れて捕らえられるのを避けようと死に物狂いになると、彼らは店舗に押し入って民間人の服を盗み、屋外で軍服を脱いだ。間もなく、街路は半裸の兵士たちだけでなく、兵士と見まちがわれることを避けようとして制服を脱ぎ捨てた半裸の警察官たちで溢れかえった。一人の男は、下着と帽子以外には何も

身にまとわずに歩き回っていた。おそらく、帽子は富裕な政府職員の家から盗んだものだったのだろう。見かけ上の秩序が残っていた退却の早い段階では、中国軍の部隊全員が制服を脱ぎ捨て、平服に着替え、隊列を組んで、同時に、行進していた。しかし、退却が潰走に転ずると、平服の争奪戦が切迫していった。歩行者に襲い掛かり、彼らの衣服を剥ぎ取った兵士たちも実際に目撃された。

日本軍と遭遇せずに市を抜け出し、北の波止場を通って揚子江に着くことができる経路はひとつしかなかった。揚子江では、ジャンクの船隊が待っていて、早く到着できれば、乗ることができただろう。波止場に到達するためには、兵士たちは幹線道路である中山路を進み、市の北西の挹江門または水門と呼ばれる城門を通り抜けて、下関の北の郊外の港に入らなければならなかった。

しかし、城門の前は、ほとんど信じられないような密集状態になっていた。ひとつの問題は、何千もの兵士が、七〇フィートの狭いトンネルに殺到したことだった。その多くはトラックや、自動車や、荷馬車に乗っていた。最初、水滴のようだった人の流れは、午後五時になると川になり、夕方、遅くなると洪水になり、誰もが漏斗の口のように細く絞られた城門の隙間を通り抜けようとした。もうひとつの問題は、退却する兵士たちが、渡河に備えて荷物を軽くしようと無数の兵器や物資を投げ棄て、その結果、城門付近に手榴弾、バス、機関銃、上衣、靴あるいはヘルメットが山になって積み重なり、交通を妨害していたことである。城門付近に築かれていたバリケードも、道路の半分を塞いでいた。この地域には惨劇の膿が溜まっていた。

唐は埠頭へ向かう運転手つきの黒塗りの乗用車の窓から、この大混乱の多くを目撃した。乗用車が大混乱さなかの人々の間を通り抜けたとき、彼は歩行者の罵声を聞いた。こんなときに、どうして自動車

に乗っていられるんだ。彼らは乗用車の乗員が唐であることに気づかず、大声で叫んだ。唐は聞こえないふりをして眼を閉じた。乗用車は最終目的地に向かって、亀のようにゆっくりと進んでいた。彼は午後六時までに埠頭に到着すると思われていたが、実際にそこに到着したときには午後八時を過ぎていた。

河岸では、救いようのない混乱が唐を待っていた。軍将校たちは、どの機器を破壊し、どれを船で揚子江を渡って運ぶかを互いに議論していた。一方、兵士たちは連結した船の列にバランスをとって戦車を載せようとしていた。そのほとんどは転覆して、沈んでしまった。

夜が更けると、兵士たちの関心は自分たち自身が川を渡ることのほうに移り、戦車や機器は放棄された。船が不足してくると、雰囲気は暴力的になり、最後には二、三艘をめぐって一万人ほどの人間が、あるいは船に乗り込もうと殺到し、あるいは空に向かって威嚇射撃をして他人を追い払おうとして争った。恐れをなした船の乗組員は、押し寄せる群集を追い払おうとジャンクやサンパンのへりにしがみつく兵士たちの指の上に斧を振り下ろした。

その夜、川を渡ろうとして、数え切れない人々が死んだ。多くは城門を通り抜けることもできなかった。その夕刻に、中山路で火事が発生し、炎が弾薬の山に燃え移り、家や自動車が火に呑み込まれた。交通パニックの中で馬は後ずさりして後ろ足で立ち上がり、群集の混乱を煽った。狂乱した兵士たちが前へ前へと押し寄せると、その圧力で何百人もの人々が炎の中に押しやられ、さらに何百人もの人々がトンネルの中に押し込まれ、そこで人々の下敷きになって踏みつけられた。城門が封鎖され炎が荒れ狂う中で、混乱した群集の外に脱することができた兵士たちは城壁に殺到してよじ登ろうとした。何百人

もの人が自分の衣服を引き裂いて紐にし、ベルトやゲートルと結び合わせて縄梯子を作った。一人一人、彼らは胸壁によじ登り、壁の間の隙間からライフルや機関銃を放り投げて下に落とした。そのほとんどの人は、落下するか、自分で飛び降りて生命を失った。

完全に船がなくなったとき、兵士たちは間に合わせの浮遊器具を頼りに、川に飛び込んだ。木製の枕木、丸太、板、バケツ、風呂桶、近所の家から盗んだドアにしがみつき、あるものはその上に座った。木製の器物が何もなくなったとき、多数の人が泳いで渡りきろうとして飛び込んだが、ほとんどの場合、その先には死が待ち受けていた。

唐と二人の副司令長官は石炭で動かす汽艇に乗り込み、さらに二人の軍参謀が到着するのを午後九時まで待ったが、二人は現われなかった。唐は汽艇の中で、人々が互いに争って金切り声を上げている喧騒を聞いた。ときどき、喧騒は日本軍の砲撃音にかき消された。そのとき、そこに見えたのは火に包まれた南京の光景だった。大火災は真っ黒な空を明るく照らしていた。

汽艇で揚子江を横切るときの唐の屈辱感を知ることはできない。ただ想像するだけである。彼が最後に見やった南京は炎に包まれた都市だった。そこの人々は狂ったように生き残りの道を求めていた。彼自身の兵士たちも、流木にしがみついて、揚子江の暗い冷たい水の中で、なんとか浮いたままの状態を維持しようとしていた。

のちに彼は友人に語った。二〇年を超える軍隊生活で何百回の戦闘を経験した中で、あの日ほど暗く悲しいことはなかった、と。